

2026・一・三【角川俳句賞2026 B t 01 全26句】選11句

角 永き日の遅筆悪筆反故の山

角 墓石の老いも若きも彼岸かな

角 花冷の十四五人に出開帳

角 頭から人現はるる御身拭

角 地虫出づれど礎石の上に何もなし

角 母校には知る人もなし桜咲く

角 桃は食はれ梅は干されて皺だらけ

角 忘却に彼方ありけり落し水

角 後ろから押され押されて大晦日

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 買ひ替へて今年楽しき年用意

角 永き日の遅筆悪筆反故の山

角 地虫出づれど礎石の上に何もなし

角 頭から人現はるる御身拭

角 松と梅枝触れあへば根の先も

角 母校には知る人もなし桜咲く

角 花堤途切れて小さき通過駅

角 花冷の十四五人に出開帳

角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水

角 忘却に彼方ありけり落し水

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 忘却に彼方ありけり雁帰る

角 頭のうへに人あらはれて御身拭

角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

角 種採つて封筒に書く宛名かな

角 鷹に窺られたる骨に肉少し

角 踏みゆくや道の落葉の裏表

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 後ろから押され押されて大晦日

角 きゅつきゅつと生きて深夜の雪を踏む

角 湯たんぽの余熱のごとし日向ぼこ

角 忘却に彼方ありけり雁帰る

角 涅槃図の嘆きのままに垂れ下る

角 頭のうへに人あらはれて御身拭

角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水

角 松手入こんな大きな枝までも

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

角 種採つて封筒に書く宛名かな

角 鷹に窺られたる骨に肉少し

角 裏おもて混じる落葉を踏みゆけり

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 後ろから押され押されて大晦日

角 忘却に彼方ありけり雁帰る 角 後ろから押され押されて大晦日

角 涅槃図の大き嘆きの吊られある

角 頭のうへに人の働く御身拭

角 花堤途切れて小さき通過駅

角 章を区切る白きページや夏始

角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水

角 スピンの涼しき顔をしてをりぬ

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

角 種採つて封筒に書く宛名かな

角 鷹に筆られたる骨に肉少し

角 裏おもて混じる落葉を踏みゆけり

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 忘却に彼方ありけり雁帰る

角 涅槃図の大き嘆きの吊られある

角 頭のうへに人の働く御身拭

角 花堤途切れて小さき通過駅

角 キャラメル of 紙の折目や花は葉に

角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水

角 スピンの涼しき顔をしてをりぬ

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

角 鷹に筆られたる骨に肉少し

角 裏おもて混じる落葉を踏みゆけり

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 後ろから押され押されて大晦日

2026・5・23【角川俳句賞2026 B tier 08】 選77句

17行3段組14ポ 2026年5月23日 21:15 へ1 桐10

角 日々日記に書くこともなく春の昼	角 をさな子のほつぺた丸くチューリップ	角 青春の淡き残像更衣
角 学校も会社も春の昼休	角 花堤途切れて小さき通過駅	角 田植機の煙を吐いて折り返す
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸かな	角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 カレンダー四月なれども常のごと	角 風船は上へ花吹雪は横へ	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 フルートの長き白銀花の冷え	角 踏切に特急を待つ暑さかな	角 土不踏ありとも見えず蟻あるく
角 転がつて判子ありけり春の雨	角 スッピンの涼しき顔をしてをりぬ	角 蟻地獄向三軒両隣
角 透明な体積ゆるる石鹼玉	角 スッピンの涼しき顔の憎らしき	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 暗うしてなほ春燈の華やげり	角 ほゑゑむにあらず大哄笑の夏の雲	角 残るもの残らざるもの蟬の翅
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 白雨とはいへど風景暗むほど	角 年輪を切れど年輪蟬時雨
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 流れ行く柱の見ゆる梅雨出水	角 枝々を隠して青葉若葉なり
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 麦酒には負ける泡立ちソーダ水	角 花は葉になつて去るべき人は去り
角 頭のうへに人の働く御身拭	角 ソーダ水飲めばたちまち背に翼	角 キャラメル紙の折目や花は葉に
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 振つて注げばビールの如しコカコーラ	角 花は葉に廻り舞台のある如く
角 かくれんぼ早よ見つけろと鳴く子猫	角 父のビールに負けじとコーラ振つて注ぐ	角 荒積みのテトラポッドに流れ星
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 麦酒酌み交さむ浦島太郎冠者	角 台風に防潮堤の重たけれ
角 轟音が鉄橋渡る桜かな	角 日の出より白く噴水噴き上る	角 ひらがなのゼッケン付けて運動会
角 花びらの硬く重たくチューリップ	角 濃き黒を薄手の黒に更衣	角 クレーンで部屋を積み上げ星祭

2026・5・23【角川俳句賞2026 B t 08】選77句

角 新米といふ稔田の明日を食ふ	角 踏み砕く落葉の表そして裏
角 新米といふ生き物の明日を食ふ	角 幹と枝の研ぎ澄まされし枯櫟
角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ	角 後ろから押され押されて大晦日
角 雪月花に色勝りける紅葉かな	角 年用意わからぬ箱は開けてみる
角 春待つや甘く巻きたる卵焼	角 新製品に今年楽しき年用意
角 画鋏の針の細長き闇山眠る	角 あれこれのこれで終りの年用意
角 冬籠ひとり己れに籠りけり	角 買ひ替へていよよ今年の年用意
角 冬深しひとり己れに籠りけり	角 この箱にこんな中身や年用意
角 厚布団羽根と羽毛の違いあり	角 累計は増える一方去年今年
角 ブランコに乗つてゆやゝん雪達磨	
角 パックしてフックに売られをる聖樹	
角 凍鶴の首の骨から背骨へと	
角 鷹に窺られたる骨に肉少し	
角 羽ばたいて白鳥水を歩くごと	
角 羽ばたいて白鳥水を歩く水の上	
角 裏おもて混じる落葉を踏みゆけり	
角 表裏なく踏み砕かれし落葉かな	

2026・5・24【角川俳句賞2026 B t-6 32/127句】

12行3段組14ボ 2026年5月24日 20:13 へ1 桐10

角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸かな

角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花

角 混み合へる画鋏の箱や山眠る

角 ひろげてはうちひろげては春の波

角 風船は上へ花吹雪は横へ

角 冬籠すなはち我に籠るなり

角 体積が丸ごと浮かぶ石鹼玉

角 スప్పिनの涼しき顔をしてをりぬ

角 ブランコに乗つてゆやくん雪達磨

角 暗うしてなほ春燈の華やげり

角 四阿の四面楚歌なる夕立かな

角 パックしてフックに売られをる聖樹

角 友の字が反の字に似る万愚節

角 麦酒には負ける泡立ちソーダ水

角 鷹に雫られたる鳥の骨白し

角 桃の花ほどに頬染め桃の酒

角 海の歌うたひ海水浴場へ

角 踏み割れば表裏別なき落葉かな

角 涅槃図の大き嘆きの吊られある

角 前向きに幹を降り来る蟻の列

角 新製品に今年楽しき年用意

角 頭のうへに人の働く御身拭

角 衰へし視力の端の蚊の羽音

角 あれこれのこれで終りの年用意

角 忘却に彼方ありけり雁帰る

角 荒積みのテトラポッドに流れ星

角 かくれんぼ早よ見つけよと鳴く子猫

角 台風に防潮堤の重たけれ

角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな

角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ

角 をさな子のほつぺた丸くチューリップ

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

2026・5・26【角川俳句賞2026 B t 10 40/17句】 選40句

角 ひろげてはうちひろげては春の波	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな
角 暗うしてなほ春燈の華やげり	角 麦酒には負ける泡立ちソーダ水
角 体積が丸ごと浮かぶ石鱈玉	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 教室の壁の画鋏も夏休
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 花篝忍者の潜む夜のお濠	角 蟻地獄いかにして巢を出づるやも
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 頭のうへに人の働く御身拭	角 あの時もこの葉桜と夏柳
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 荒積みのテトラポッドに流れ星
角 かくれんぼ早よ見つけよと鳴く子猫	角 台風に防潮堤の重たけれ
角 うちの子の自慢話とその子猫	角 おほかたは人恋しさよ火恋し
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ
角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 山に雪プリンの上に茶のソース
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 混み合へる画鋏の箱や山眠る
角 風船は上へ花吹雪は横へ	角 良き日差し追ふ術もなし日向ぼこ
角 スప్పिनの涼しき顔で否と言ふ	角 冬籠すなはち我に籠るなり

17行3段組14ボ 2026年5月26日 12:13 へ1 桐10

角 ブラunkoに乗つてゆやくん雪達磨	角 踏み割れば表裏別なき落葉かな
角 パックしてフックに売られをる聖樹	角 あれこれのこれで終りの年用意
角 年用意新製品に買ひ替へて	角 初刷の見開き富士のやや歪

2026・5・26【角川俳句賞2026 A t 11 40/172句】選0句

角 ひろげてはうちひろげては春の波	角 風船は上へ花吹雪は横へ
角 暗うしてなほ春燈の華やげり	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 麦酒には負ける泡立ちソーダ水
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 花篝忍者の潜む夜のお濠	角 教室の壁の画鋏も夏休
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 頭のうへに人の働く御身拭	角 蟻地獄いかにして巢を出づるやも
角 砂浜に夢の化石の桜貝	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 あの時もこの葉桜と夏柳
角 かくれんぼ早よ見つけよと鳴く子猫	角 台風を迎へ撃つべく遊園地
角 うちの子の自慢話とその子猫	角 盆用意わけのわからぬ箱もある
角 うちの子といふは猫の子日だまりの	角 おほかたは人恋しさよ火恋し
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ
角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 良き日差し追ふ術もなし日向ぼこ
角 その下になに隠るるや何花筏	角 冬籠すなはち我に籠るなり
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 寒卵割つて裸の寒卵

角 ブランコに乗つてゆやくん雪達磨
角 パックしてフックに売られをる聖樹
角 踏み割れば表裏別なき落葉かな
角 あれこれのこれで終りの年用意
角 年用意新製品に買ひ替へて
角 初刷の見開き富士のやや歪

2026・5・28【角川俳句賞2026 B t 12 40/16句】選40句

角 ひろげてはうちひろげては春の波	角 麦酒には負ける泡立ちソーダ水
角 暗うしてなほ春燈の華やげり	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 教室の壁の画鋏も夏休
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 花篝忍者の潜む夜のお濠	角 蟻地獄いかにして巢を出づるやも
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 頭のうへに人の働く御身拭	角 あの時もこの葉桜と夏柳
角 砂浜に夢の化石の桜貝	角 台風を迎へ撃つべく遊園地
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 盆用意わけのわからぬ箱もある
角 かくれんぼ早よ見つけよと鳴く子猫	角 おほかたは人恋しさよ火恋し
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ
角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 その下になにに隠るるや何花筏	角 良き日差し追ふ術もなし日向ぼこ
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 風船は上へ花吹雪は横へ	角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 障子なき暮しなれども古畳

角 パックしてフックに売られをる聖樹	角 寒卵割つて裸の寒卵
角 あれこれのこれで終りの年用意	
角 年用意新製品に買ひ替へて	
角 初刷の見開き富士のやや歪	
角 ブランコに乗つてゆやくん雪達磨	

2026・5・28【角川俳句賞2026 B t-1349/20句】選句

17行3段組14ポ 2026年5月28日 22:33 へ1 桐10

角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 台風を迎へ撃つべく遊園地
角 転がつて判子ありけり春の雨	角 風船は上へ花吹雪は横へ	角 クレーンで部屋を積み上げ星祭
角 川原まで行つて踏みゆく春の土	角 踏切に鈍行を待つ暑さかな	角 盆用意わけのわからぬ箱もある
角 ひろげてはうちひろげては春の波	角 大雷雨時計の針の重なりて	角 おほかたは人恋しさよ火恋し
角 暗うしてなほ春燈の華やげり	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 花篝忍者の潜む夜のお濠	角 海の歌うたひ海水浴場へ	角 障子なき暮しなれども古畳
角 湯ぼてりの如く水飲む花疲れ	角 教室の面鋏寂しき夏休	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 除雪車を動かしてゐる皮衣
角 頭のうへに人の働く御身拭	角 蟻地獄向三軒両隣	角 寒卵割つて裸の寒卵
角 砂浜に夢の化石の桜貝	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 パックしてフックに売られをる聖樹
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 年輪を切れど年輪蟬時雨	角 表裏なく踏み砕かれし落葉かな
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 あの時もこの葉桜と夏柳	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 たけのこの里もきのこの山も秋	角 初刷の見開き富士のやや歪
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	
角 その下になにに隠るるや何花筏	角 酔ひしれて言葉に溺れ天の川	

角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 頭のうへに人の働く御身拭	角 揉まれたる一枚一枚の胡瓜
角 転がつて判子ありけり春の雨	角 砂浜に夢の化石の桜貝	角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな
角 川幅も次第に春の川らしく	角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 乾杯のビールジョッキをぶつけ合ひ
角 川原まで行かねば踏めぬ春の土	角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 青春はすでに思ひ出更衣
角 ひろげてはうちひろげては春の波	角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 教室の画鋏寂しき夏休
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 その下になにに隠るるや花筏	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 海までの長き旅路を雛かな	角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 蟻地獄向三軒両隣
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 空をゆく風船を追ふ花吹雪	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 花簪忍者の潜む夜のお濠	角 踏切に鈍行を待つ暑さかな	角 年輪を切れど年輪蟬時雨
角 湯ぼてりの如く水飲む花疲れ	角 大雷雨時計の針の重なりて	角 圧力に玉葱溶くるカレーかな
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 万緑や男も入る美人の湯

2026・5・29【角川俳句賞2026 B t 14 57／208句】

角 あの時もこの葉桜と夏柳

角 障子なき暮しなれども古畳

角 たけのこの里もきのこの山も秋

角 冬籠ひたすら我に籠るなり

角 ドア開けて我家の外の秋の暮

角 除雪車を動かしてゐる皮衣

角 長き夜の右へ左へ繰るページ

角 寒卵割つて裸の寒卵

角 酔ひしれて言葉に溺れ天の川

角 パックしてフックに売られをる聖樹

角 台風を迎へ撃つべく遊園地

角 通信簿家計簿クリスマス前夜

角 クレーンで部屋を積み上げ星祭

角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな

角 盆用意わけのわからぬ箱もある

角 年用意新製品に買ひ替へて

角 圧力をかけて新米炊き上げる

角 初刷の見開き富士のやや歪

角 柔らかな岩の如くに鹿眠る

角 五指に余る秋果の幸を先づひとつ

角 雪月花に色勝りける紅葉かな

2026・5・29【角川俳句賞2026 B t 1540/165句】選40句

角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 乾杯のビールジョッキをぶつけ合ひ
角 川幅も次第に春の川らしく	角 青春はすでに思ひ出更衣
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 海の歌うたひ海水浴場へ
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 教室の画鋏寂しき夏休
角 海までの長き旅路を難かな	角 前向きに幹を降り来る蟻の列
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 衰へし視力の端の蚊の羽音
角 花篝忍者の潜む夜のお濠	角 年輪を切れど年輪蟬時雨
角 湯ぼてりの如く水飲む花疲れ	角 あの時もこの葉桜と夏柳
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 たけのこの里もきのこの山も秋
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 ドア開けて我家の外の秋の暮
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 長き夜の右へ左へ繰るページ
角 をさな子のほつぺた丸しチューリップ	角 台風を迎へ撃つべく遊園地
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 盆用意わけのわからぬ箱もある
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 圧力をかけて新米炊き上げる
角 空をゆく風船を追ふ花吹雪	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 障子なき暮しなれども古畳

角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 寒卵割つて裸の寒卵
角 パックしてフックに売られをる聖樹
角 表裏なく踏み砕かれし落葉かな
角 年用意新製品に買ひ替へて
角 初刷の見開き富士のやや歪

2026・5・30【角川俳句賞2026 B t 16 4 7/180句】選47句

17行3段組14ポ 2026年5月30日 11:38 へ1 桐10

角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 アパートに鳴く虫ひとつ時にふたつ
角 川幅も次第に春の川らしく	角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 乾杯のビールジョッキをぶつけ合ひ	角 雪月花に色勝りける紅葉かな
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 子のマフラー編む愛しさよ短かさよ
角 海までの長き旅路の難かな	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 障子なき暮しなれども古畳
角 桃の花ほどに頬染め桃の酒	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 湯ぼてりの如く水飲む花疲れ	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 寒卵割つて裸の寒卵
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 年輪を切れど年輪蟬時雨	角 パックされて売場に並ぶミニ聖樹
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 あの時もこの葉桜と夏柳	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 たけのこの里もきのこの山も秋	角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな
角 忘却に彼方ありけり雁帰る	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	角 靴先の中の足先落葉踏む
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 長き夜の右へ左へ繰るページ	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	角 初刷の見開き富士のやや歪
角 をさな子のほつた丸しチューリップ	角 秋灯の団地給水塔高し	
角 花下に立ち幹に凭れて目を瞑る	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 圧力で炊く新米の鍋重し	
角 空をゆく風船を追ふ花吹雪	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る	

2026・5・30【角川俳句賞2026 B t 1747/176句】 選47句

17行3段組14ポ 2026年5月30日 18:42 へ1 桐10

角 あたたかや赤子笑つてゐるだけで	角 乾杯やビールジョッキをぶつけ合ひ	角 賽の目の西瓜は客にあとは子に
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな
角 ふり止んで春雨少し短かけれ	角 サングラス額の汗も光るなり	角 子のマフラー編む愛しさよ短かさよ
角 川幅も次第に春の川らしく	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 マフラーを伸ばして機嫌良かりけり
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 庭に出て夜濯ぎするや蚊の餌食	角 障子なき暮しなれども古畳
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 海までの長き旅路の難かな	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 寒卵割つて裸の寒卵
角 夜桜の散り放題に夜は更けて	角 たけのこの里もきのこの山も秋	角 パックされて売場に並ぶミニ聖樹
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 長き夜の右へ左へ繰るページ	角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	角 靴先の中の足先落葉踏む
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 秋灯の団地給水塔高し	角 皮むかず蜜柑むさばる臍残る
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 圧力で炊く新米の鍋重し	
角 明易の保線作業を終りけり	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る	
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 蟬より長き羽根の蜻蛉や鳴きもせず	
角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 アパートに鳴く虫ひとつ時にふたつ	

2026・5・31【角川俳句賞2026 B t 18 49/20二句】選〇句

角 あたたかや赤子笑つてゐるだけで	角 ゴム底の白靴化繊の野球帽	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る
角 春昼の切られし糸の余りかな	角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 蜻蛉の翅の長さよ鳴きもせず
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 乾杯やビールジョッキをぶつけ合ひ	角 アパートに鳴く虫ひとつ今ふたつ
角 川幅も次第に春の川らしく	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 角切りの西瓜は客にあとは子に
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 サングラス鏡仕立ての早や古ぶ	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 平成の鏡仕立てのサングラス	角 子のマフラー編む愛しさよ短かさよ
角 海までの長き旅路の難かな	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 障子なき暮しなれども古畳
角 おそろしきものに月夜の花吹雪	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 寒卵割つて生身の寒卵
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 たけのこの里もきのこの山も秋	角 パックされて売場に並ぶミニ聖樹
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 落椿あまたの赤き水輪かな	角 長き夜の右へ左へ繰るページ	角 寒に耐へ丸く膨らむ雀かな
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	角 表裏なく踏み砕かれし落葉かな
角 鉄橋を轟音越ゆる桜かな	角 七夕の団地給水塔高し	角 皮むかず蜜柑むさぼる蒂残る
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 思ひ出の薄れて哀し遠花火	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 明易の保線作業を終りけり	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 圧力で炊く新米の鍋重し	

角 あたたかや赤子笑つてゐるだけで	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 春昼の切られし糸の余りかな	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 寒卵割つて生身の寒卵
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 パックされて売場に並ぶミニ聖樹
角 川幅も次第に春の川らしく	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 たけのこの里もきのこの山も秋	角 寒に耐へ丸く膨らむ雀かな
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	角 表裏なく踏み砕かれし落葉かな
角 海までの長き旅路の難かな	角 長き夜の右へ左へ繰るページ	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 おそろしきものに月夜の花吹雪	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	角 サングラス鏡面仕立て早や古ぶ
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 七夕の団地給水塔高し	角 轟音が鉄橋渡る山桜
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	角 落椿赤き水輪と思ふなり
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 圧力で炊く新米の鍋重し	角 ゴム底の白靴、化繊の野球帽
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る	角 丸ごとの蜜柑むさぼる臍残る
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 蜻蛉の翅の長さよ鳴きもせず	
角 明易の保線作業を終りけり	角 アパートに鳴く虫ひとつ今ふたつ	
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 角切りの西瓜は客にあとは子に	
角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな	
角 乾杯やビールジョッキをぶつけ合ひ	角 障子なき暮しなれども古畳	

角 あたたかや赤子笑つてゐるだけで	角 ゴム底の白靴、化繊の野球帽	角 角切りの西瓜は客にあとは子に
角 春昼の切られし糸の余りかな	角 息継ぎもせずに飲み干す麦酒かな	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 乾杯やビールジョッキをぶつけ合ひ	角 たけのこの里にきのこのこの山に雪
角 川幅も次第に春の川らしく	角 青春はすでに思ひ出更衣	角 障子なき暮しなれども古畳
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 サングラス鏡面仕立て早や古ぶ	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 寒卵割つて生身の寒卵
角 海までの長き旅路の難かな	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 店先に並ぶパックのミニ聖樹
角 おそろしや雨ふる夜の花吹雪	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 ドア開けて我家の外の秋の暮	角 寒に耐へ丸く膨らむ雀かな
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 長き夜の右へ左へ繰るページ	角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	角 丸ごとの蜜柑むさぼる臍残る
角 落椿赤き水輪と思ふなり	角 七夕の団地給水塔高し	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	
角 轟音が鉄橋渡る山桜	角 圧力で炊く新米の鍋重し	
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る	
角 明易の保線作業を終るころ	角 蜻蛉の翅の長さよ鳴きもせず	
角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 アパートに鳴く虫ひとつ今ふたつ	

2026・5・31【角川俳句賞2026 B t ー2150/220句】 選50句

角 あたたかや赤子笑つてゐるだけで	角 ゴム底の白靴、化繊の野球帽	角 天国と対の地獄や敗荷
角 囀れば小川の水も奏づるよ	角 乾杯やビールジョッキをぶつけ合ひ	角 圧力で炊く新米の鍋重し
角 川幅も次第に春の川らしく	角 教室の画鋏寂しき夏休	角 ポケットも子の手も小さき木の実かな
角 磨る墨の短くなりし梅の花	角 サングラス鏡面仕立て早や古ぶ	角 ドア開けて我家の外の秋の暮
角 海までの長き旅路の難かな	角 前向きに幹を降り来る蟻の列	角 長き夜の右へ左へ繰るページ
角 牡丹餅の粒餡好きの彼岸なり	角 衰へし視力の端の蚊の羽音	角 障子なき暮しなれども古畳
角 涅槃図の大き嘆きの吊られある	角 夕焼や階下の町も炎の色に	角 表裏なく踏み碎かれし落葉かな
角 春昼の切られし糸の余りかな	角 四阿の四面楚歌なる夕立かな	角 冬籠ひたすら我に籠るなり
角 友の字が反の字に似る万愚節	角 明易の保線作業の終るころ	角 丸ごとの蜜柑むさぼる臍残る
角 桜貝ちひさな人に拾はれて	角 角切りの西瓜は客にあとは子に	角 店先に並ぶパックのミニ聖樹
角 海を出て煮られ食はれて浅蜷の殻	角 七夕の団地給水塔高し	角 年用意新製品に買ひ替へて
角 落椿赤き水輪と思ふなり	角 盆用意わけのわからぬ箱もある	角 初乗の電車に遠く司令室
角 轟音が鉄橋渡る山桜	角 鬼灯の花は知らねど買つて来る	角 たけのこの里にきのこの山に雪
角 仮の名と言はれし仮名ぞ飛花落花	角 柔らかな岩の如くに鹿眠る	角 寒卵割つて生身の寒卵
角 暗ければ暗き華やぎ春燈	角 蜻蛉の翅の長さよ鳴きもせず	角 寒鴉用心棒の声を出す
角 おそろしや雨ふる夜の花吹雪	角 アパートに鳴く虫ひとつ今ふたつ	角 恋人と春待つ花を数ふれば
角 青春はすでに思ひ出更衣	角 台風を迎へ撃つべく遊園地	